

第3章 所沢市の歴史文化の特性

本計画では、地域固有の風土の下で、先人によって生み育まれ、時には変容しながら現代まで伝えられてきた知恵・経験・活動などの成果及びそれらが存在する環境を総体的に把握した概念を「歴史文化」と呼び、本章で示す歴史文化の特性とは、地域らしさ、地域の特性をあらわします。

本市の歴史文化の特性は、次の六つに特徴づけられます。

1. 開発、開拓の歴史

武蔵野台地上にある本市は、原野を切り開いて人々が住むようになりました。近世の武蔵野新田開発は、幕府や川越藩が積極的に推進し、その後、第二次世界大戦直後は所沢飛行場跡地などが農地へと開拓されました。

2. 道と人、モノの交流

古代は武蔵国府に向かう東山道武蔵路、中世は鎌倉幕府に向かう鎌倉街道が通り交通の要衝となりました。近世は物流の拠点として発展し、所沢は周辺の産物を集荷して三八市が開かれ、新河岸川の河岸場へ向かう道が発達しました。やがて町場で山車まつりが開かれ賑わいました。

3. 武蔵野台地の暮らしと文化

水に乏しい武蔵野台地の暮らしは厳しいものでした。作物は雑穀を中心とし、水はけのよい地形から甘藷や茶がつくられるようになり、薪炭、織物なども生産され、養蚕も盛んでした。年の節目に祭りなどの行事があり、文化の交流もありました。

4. 航空の始まりとつながり

明治44（1911）年4月に開設した陸軍所沢飛行場は日本初の飛行場であり、フランス製のアンリ・ファルマン機が徳川好敏大尉の操縦で飛行に成功しました。その後、飛行学校や飛行整備学校が設立され、日本航空史の礎が築かれました。

5. 歴史文化から生まれた所沢ブランド

現在、プロ野球「埼玉西武ライオンズ」の本拠地として知られる所沢は、かつては所沢飛行場で知られ、明治時代、大正時代、昭和戦前期は綿織物である所沢織物の一大産地として有名でした。また、狭山茶の歴史は古く幕末から明治時代に米国へ輸出もしていました。

6. 自然と人との密接な関わり

狭山丘陵の樹林や台地上の平地林の風景は本市の大きな特徴です。映画「となりのトトロ」で知られるようになった狭山丘陵の自然に、多種類の動植物が生息・生育しています。農地に隣接した樹林は里山と呼ばれ、人々のくらしや生業と密接に関わってきました。

第1章、第2章で見てきたように本市が歩んできた歴史文化は、自然的地理的条件によりながら、人々の活発な活動によってつくられてきました。以下に歴史文化の特性を具体的に解説します。

1. 開発、開拓の歴史

本市の歴史的特性の一つは、開発や開拓の歴史です。「開発」と「開拓」は同義で、荒地や森林を切り開いて田畑や宅地にすることを意味します。「開発」は、現在は土地を造成して住宅やマンションを造るイメージですが、江戸時代は荒地を切り開いて耕地にする意味で使われ「かいほつ」とも発音しました。「開拓」はどちらかという、戦後の開拓事業のように耕地だけでなく道路や宅地も含んだ広域の開発の意味で使われます。本市は、水に恵まれない武蔵野台地の広大な原野を先人が切り開いたことで、今日の地域の原型がつけられました。

最初に人は川に近い台地の縁^{へり}に住み始めました。本市に人が住み始めた時期は3万年以上前の旧石器時代に遡ります。当時は移住生活でしたが、その後縄文時代に集落を形成し定住するようになります。その後、弥生時代を経て、古墳時代、奈良・平安時代へと続き、次第に台地の奥へ奥へと切り開いていきました。中世の時代に、久米郷、安松郷、山口郷、三ヶ嶋郷など郷村が形成されました。

近世には大規模な武蔵野新田開発が行われました。新田開発といっても畑地です。近世の新田開発は、幕府や藩によって進められ、最初は江戸時代前期の寛文・延宝期（1661～1681）に実施されました。幕府による開発は小手指地区、三ヶ島地区を中心とし、川越藩による開発は寛文4（1664）年に柳瀬地区（南永井、亀ヶ谷）で行われました。続いて元禄7（1694）年、川越藩により三富新田開発が着手され短期間に実施されました。同藩の御林であった地藏林を中心に上富（現三芳町）、中富、下富の3か村に分け、三富新田と呼ばれています。耕地を短冊型に均等に配分した特徴的な地割を、今も見ることができます。そして享保8（1723）年、幕府による武蔵野新田開発が始まると富岡地区を中心に開発地は拡大しました。神米金、所沢新町、北岩岡、北中の地名のある土地はこの時に開かれた地域です。このような、もともと耕作に適さない土地を開墾し、そこで農業を営み生活することは水の確保の問題も含め困難を極めました。そうした労苦は国重要文化財の小野家住宅や埼玉県旧跡の三富開拓地割遺跡において伝えられており、残された様々な資料からもうかがうことができます。

第二次世界大戦の終戦直後は所沢飛行場跡地周辺をはじめ小手指地区や柳瀬地区でも開拓が進められました。これは大量の復員軍人や引揚者の失業問題に加え、深刻化した食糧不足に対処するために行われたもので、飛行場などの軍用地跡は当時の内閣によって開拓事業実施の方針が決められました。新所沢東地区や並木地区、柳瀬地区の松郷・新郷や小手指地区の一部はこうした理由により地域が形づくられました。



写真 3-1 新田開発（三富新田）



写真 3-2 戦後の開拓農民

2. 道と人、モノの交流

本市の歴史的発展の要因の一つは、道がつくられ、道と道が交差して町場が繁栄したことにあります。古代には東山道武蔵路、中世には鎌倉街道が通り、その中継的な場所が現在の所沢と吾妻地区にあったと推定されます。鎌倉街道が整備された頃は通過する狭山丘陵付近に数々の寺院がつくられ、また武蔵武士の活躍により城館が築造されました。

近世には、江戸道・秩父道・青梅道・河岸街道・川越道といった道が整備されました。それらの道が交差する場所が町場を形成した所沢村でした。町場には市が立ち、周辺からは生産物が集荷され、あるものは新河岸川の河岸場へ、あるものは陸路で江戸に運ばれ、逆に江戸から様々なモノが運び込まれました。また秩父と江戸を結ぶ往還道の宿継ぎ場として、人々が活発に往き来し、交流も盛んでした。

近代の鉄道敷設は、本市のさらなる発展につながりました。明治28（1895）年に川越鉄道（現在の西武新宿線・国分寺線）が開通し所沢駅が開設されました。大正4（1915）年には武蔵野鉄道（現在の西武池袋線）が開通しました。これら二つの路線の開通に共通する背景は、当時織物の町として繁栄していた所沢の商人の経済力でした。

川越鉄道は、所沢と入間川の商人たちが甲武鉄道と川越をつなぐ鉄道の必要性を感じ、鉄道会社を設立して敷設したものです。また、武蔵野鉄道は横浜銀行（現在の横浜銀行ではない）の頭取で飯能出身の平沼専蔵が所沢・飯能の商人と鉄道会社を設立して敷設したものです。その後、両鉄道会社は西武鉄道へ吸収合併され現在に至ります。

交通の要衝であった所沢は、近世の初めから市が開かれました。寛永16（1639）年には市の安全と繁栄を願った祭文^{さいもん}が作成され、少なくとも延宝期（1673～1681）には月に三と八のつく日に六斎市が開催されるようになりました。近世の後半から周辺で織られる木綿縞や木綿紆が所沢織物として流通するようになりました。

経済的に発展することにより所沢の町場は活況を呈し、明治時代になると所沢の鎮守神明社の秋の祭礼として山車まつりが行われるようになりました。



写真 3-3 鎌倉街道（吾妻地区）



写真 3-4 三八の市（昭和10年代）

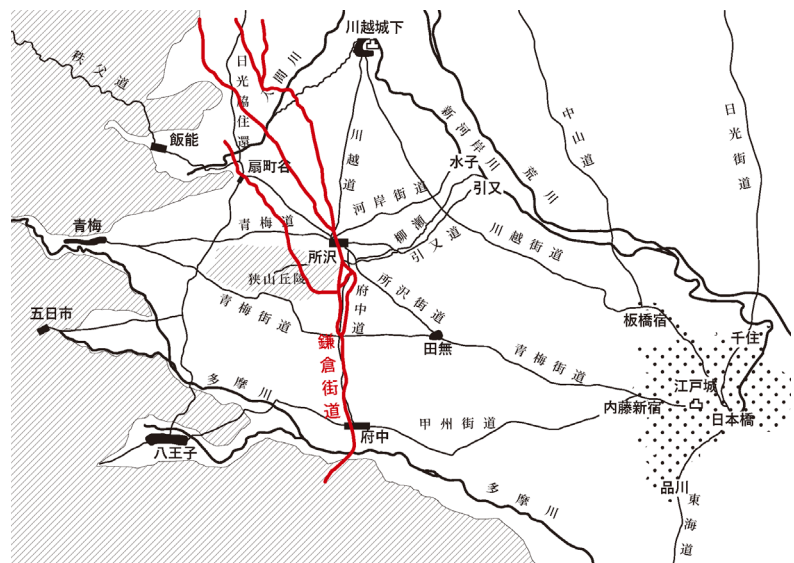


図 3-1 鎌倉街道及び江戸時代の交通網

3. 武蔵野台地のくらしと文化

武蔵野台地での生活と生産は厳しいものでした。火山灰土に覆われた台地は水に乏しく、また作物も育ち難い環境でした。人々は、水は遠くの川から運び、あるいは深い井戸を掘って共同で使用しました。また作物は麦・粟・稗など雑穀を中心に生産し、かつ水はけのよい土地に適した甘藷や茶などを植えるようになり、その後、薪炭、養蚕、織物といった換金性の高い産物を生産するようになりました。

このような厳しい生活環境のなかで人々はさまざまな知恵と工夫を凝らしてきました。たとえば、住生活でいえば屋敷の北側には冬の北風を防御するために常緑樹を植え、南側には夏の台風による強風を直接受けないようにするため低木を植えて凌ぎました。また生産用具は、目的や時期によって使い分けられていました。田畑を耕す鋤一つをとっても、開墾当初に使用するクロックワと呼ばれる鋤は石の除去や根切りなどに耐えるよう幅広で厚い刃が取り付けられており、土を均したり畝をつくったりするのに用いるマンガックワやマドックワと呼ばれる鋤は歯が3本ないし4本に分かれたり歯に隙間を設けたりして軽量化が図られました。土をかけるフリコミジョレンにしても重く粘り気のある真土は後進型、台地上の軽い土の場合は前進型が使われました。

くらしの道具の工夫は旧石器時代まで遡ることができます。遺跡からはナイフ形石器や尖頭器などの石器が出土しています。石器の原石は黒曜石が多く、遠く中部地方の高地や神津島産のものが持ち込まれており、人々の交流や交易が広範囲に渡っていました。また縄文時代は、深鉢型や浅鉢型などの土器や石皿やすり石などの調理用具が数多く発見されており実用性の高い土器が多種類つくられるようになったことを示しています。弥生時代には壺形土器や埋葬用の土器などもつくられるようになりました。

人々は、このような生活環境のなかで節目節目に祭礼や行事を行い、時には病や災いを除けるため、時には豊作や商売繁盛、家内安全を願う行事を催して過ごしてきました。やがてそれらの行事のなかで踊りや舞いが行われ、お囃子が演奏されるようになりました。本市では山口地区の岩崎鯨獅子舞や、本市出身の古谷重松によって独自に編み出され周辺に普及した重松流祭ばやしが今も継承されています。くらしが豊かになると山車を購入してお囃子を演奏するようになり、各町内会でも競うように山車を求めました。

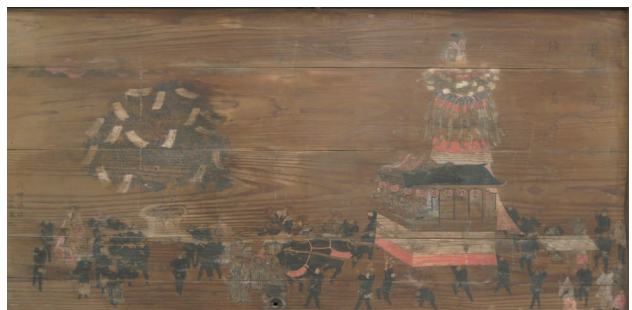
こうした行事を通して獅子舞やお囃子が継承され、また俳諧（俳句）や歌（短歌）の普及、学問、将棋、剣術など多岐にわたる文化の交流も見られました。



写真 3-5 台地の農業



写真 3-6 脱穀作業（富岡地区）

写真 3-7 古谷重松奉納祭囃子祭礼図絵馬
(入間市指定文化財 / 入間市久保稻荷神社)

4. 航空の始まりとつながり

本市の歴史的な出来事の一つは、明治44（1911）年に日本初の飛行場が開設されたことです。日本における大空への挑戦は陸軍によって始められました。当時の陸軍では臨時軍用気球研究会を組織し、この分野の先進国であったフランスとドイツに徳川好敏大尉と日野熊蔵大尉を派遣する一方、国内に飛行場用地を探しました。そして選ばれたのが所沢で、土地の起伏が少なく落雷の危険が少なかったなど諸説ありますが、東京近郊で広大な土地があり鉄道が敷かれていたことも大きな理由と考えられます。明治43（1910）年、徳川大尉はフランスで購入したアンリ・ファルマン機とブレリオ機を、日野大尉はドイツで購入したライト機とグラデー機とともに帰国し4機は中野気球隊を経て所沢に運び込まれ、翌年4月に所沢飛行場が開設されると飛行に成功しました。その後、徳川式と呼ばれる国産飛行機や飛行船がつくられ、飛行試験が繰り返されました。所沢には全国から沢山の人々が飛行機見学に訪れ、ヨーロッパからも訪問飛行が来所しました。大正8（1919）年に、フォール大佐らフランス航空教育団が訪れたことで同年飛行学校が開設され、操縦士や整備士の育成も行われるようになり多くの有能な人材を出しました。

一方、日本初の航空機事故も市域で起こりました。大正2（1913）年3月28日、青山練兵場でブレリオ機の飛行披露を終えた木村鈴四郎中尉と徳田金一中尉は帰路所沢飛行場に到着する手前で突風にあおられ墜落死しました。この事故は全国の関心を集める悲しい出来事でしたが、航空の歴史は彼らのような勇敢な飛行士たちの挑戦のうえに築かれ、安全な飛行につながっているということを知る必要があります。

第二次世界大戦後、所沢飛行場用地は米軍に接收され当初は兵站基地として、のちに通信基地として使用されました。その後返還運動によって接收された面積の約7割が返還され、共同住宅や公共施設などに使用されましたが、今なお返還運動は続けられています。

航空の歴史は、所沢飛行場や米軍基地そのものの歴史だけでなく、飛行学校の存在や飛行場周辺の歴史文化といったつながりの側面も見逃せません。町には飛行機の絵葉書を売る土産屋や飛行機煎餅を売る菓子屋があったり、地元の請願によって設置された遊郭があったりしました。また戦後は市街地の女性たちの働きかけで基地内の米軍将校夫人たちとの文化交流として日米婦人大学が開かれたことも知られています。

それぞれにかかわった人や国とのつながりは本市にとっての財産であり大切にしていきたいものです。

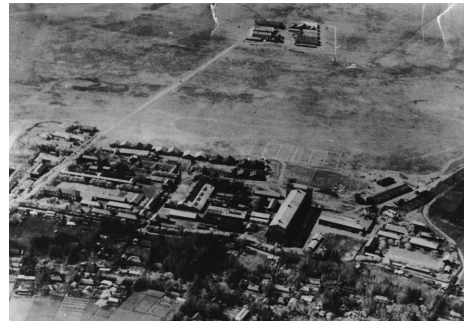


写真 3-8 所沢飛行場（大正時代）

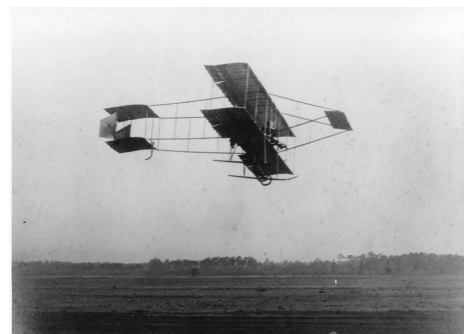


写真 3-9 アンリ・ファルマン機

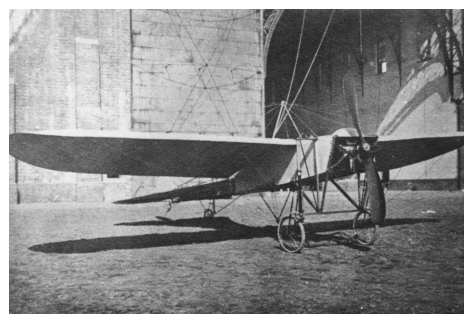


写真 3-10 ブレリオ機



写真 3-11 木村・徳田両中尉墜落

5. 歴史文化から生まれた所沢ブランド

本市の名称である「所沢」は、知名度が高くブランド力があるといっただいでしょう。現代はプロ野球「埼玉西武ライオンズ」の本拠地、また、映画「となりのトトロ」で知名度を定着させましたが、それ以前からその名は広く知られていました。

所沢織物 歴史のなかで最初にブランド力を発揮したのは所沢織物です。現代でこそ影を潜めましたが、本市周辺では江戸時代後半から綿織物が盛んでした。幕末の横浜開港による輸入綿糸の導入と、高機と呼ばれる機織り機の登場で一段と生産量が増し、所沢に集荷されたことで「所沢織物」として全国に流通しました。なかでも「所沢緋（所沢飛白）」は大衆に人気の綿織物でした。明治時代後期には久留米、伊予とならぶ緋の産地となり、所沢はこうした緋をはじめとする綿織物や絹綿交織物

が取引される「織物の町」として知られました。緋は、大正時代の後半から不況の影響を受けました。それでも「湖月縮」などの新商品を開発して起死回生を図ったものの、産地間競争に勝てず昭和10年前後には低迷を余儀なくされ、やがて戦争を経て徐々に衰退していきました。

所沢飛行場 飛行場の開設により所沢飛行場は新聞、雑誌に取り上げられました。そして、当時珍しかった飛行機への興味関心とともに「所沢」の名前が全国に知られました。飛行場近くでは絵葉書屋が店を開き、飛行場や飛行機の写真を刷り込んだ絵葉書がよく売れたといひます。また町が発行する記念絵葉書にも、風景写真に合成で飛行機の写真を嵌め込むなど、町をあげて飛行場をPRし「所沢と言えば飛行場」というくらいに知名度があがりました。

狭山茶 所沢を含む入間地方は狭山茶の産地としても知られていひます。現在、狭山茶の生産高は埼玉県内で入間市に次いで2位です。もともと入間地方は中世に河越茶の歴史があり、それを江戸時代後半に入間郡二本木村（現入間市）の吉川温恭^{よしずみ}らが復興したのが狭山茶の始まりです。幕末から明治時代前期にはアメリカへも輸出されました。ブランド名は地名ではなく、輸出を請け負った狭山会社という会社名から来ていひます。本市では三ヶ島や富岡地区の台地上や、吾妻、山口、小手指地区の丘陵の北側斜面などで広く栽培されていひました。

安松の竹細工 本市の松井地区はかつて農家の副業として竹細工の箒や籠の生産が盛んで「安松ざる」として知られていひました。その歴史は古く文明18（1486）年に書かれた『廻国雑記』にも安松の竹細工と推定される記述があり、江戸幕府が編さんした『新編武蔵風土記稿』の上安松村の項に「安松箒」の記述が見えます。柳瀬川流域に竹が自生していたこと、農家の規模が小さく副業が必要だったことなどから発達したと考えられます。第二次世界大戦の終戦直後には竹細工にかかわっていた人は200人以上いたといひます。

このほか、所沢は雛人形や押絵羽子板、甘藷の栽培を始めた地としても知られていひます。特に甘藷栽培の始まりは「川越いも」のルーツともなわれていひます。また生産物ではありませんが、保健所発祥の地、商業高校発祥の地など所沢が最初という事象があることも所沢のブランド力を高めていひます。



写真3-12 所沢飛白（所沢織物）



写真3-13 狭山茶の茶摘み（富岡地区）

6. 自然と人との密接な関わり

本市の特徴的な自然環境は、西南に位置する狭山丘陵、台地上の平地林、柳瀬川・東川・砂川堀などの河川周辺の低地にあります。なかでも映画「となりのトトロ」の舞台のモデルの一つとなった狭山丘陵は、樹林、草地、湿地、池などの自然環境があり、生息・生育する動植物も多種類に及びます。丘陵の湧き水や、小河川にさまざまな生き物の生息が確認されています。近年の調査では、カタクリやハンノキ（植物）、トウキョウサンショウウオやヤマアカガエル（両生類）、オオムラサキやサラサヤンマ（昆虫類）は本市では狭山丘陵でのみ確認されています。

丘陵や台地上には農地の近くに里山と呼ばれる樹林があります。そこにはコナラやクヌギなどの落葉樹が植えられ、かつては薪炭として、あるいは落ち葉を堆肥として使うなど人々の生業や生活に欠かせない存在でした。また農家は作業ができるように庭を広く取り、屋敷（居宅）の北側に冬の強い北西季節風を避けるためシラカシやケヤキを主体とした高木を屋敷林として植え、その間にもスギや竹などを植えました。一方で南側は低木や春から秋まで豊かに葉を繁らせる柿などを植え、台風などの南から吹く強風に対処したといえます。台地上の樹林（平地林）では、近年の調査でホンDIGツネなどの小動物のほか、水辺が少ない場所ながらアズマヒキガエルなどのカエル類やギンヤンマなどの飛翔能力の高いトンボ類が確認されています。これらの生きものは、農家の庭の池などを利用しているのだろうとの指摘があります。農地には、アズマモグラやコウモリ類などの哺乳類も確認されています。

柳瀬川でホトケドジョウなどの淡水魚やヌカエビなどの甲殻類が確認されています。かつて狭山丘陵内の谷戸田（谷津田）の水路などに、国の天然記念物ミヤコタナゴも生息していましたが、近年は人工増殖で種の保存に努めています。東川などでは、カルガモなどの鳥類が確認されているほか、カワセミ（鳥類）やヤマカガシ（爬虫類）などの希少種も生息しています。これらは餌となる両生類、魚類、昆虫類の多い良好な環境であることを示しています。このほか市街地における自然環境にもさまざまな動植物が生息・生育しています。

また、丘陵、台地、市街地に見られる鳥類としてオオタカやキジがいます。

このように、本市は自然環境が人々の生活や生業の近くにあり、絶えず人々との関わりの中で生き物が生息し自然景観がつけられてきたといえます。



写真 3-14 狭山丘陵の雑木林



写真 3-15 屋敷林（柳瀬地区）



写真 3-16 ミヤコタナゴ